

## 1959年：レナート・セルゲイストローラ

### 芸術は悪にとっての脅威でなければならない

1959年、広大なフレスコ画「いのちの流れに」がコーのダイニングルームの壁に描かれました。このフレスコ画の作者であるフィンランド人画家レナルト・セルゲイストローラは、コーのビジョンを表現するために、普遍的な水のイメージを選びました。コーは人々が心の内なる渇きを癒すために訪れ、渇いた世界に命の水を取り出す場所だからです。フレスコ画の中央の暗い人物は、井戸に映る自分自身を見て屈み、変容して立ち上がり、生命に輝いています。

当時68歳だったセルゲイストローラは、フィンランドで最も有名な動物画家であり、記念碑的なフレスコ画や壁画でよく知られています。彼の作品105点を所蔵するフィンランド国立美術館は、「善と悪の並置」を中心テーマとしています。セルゲイストローラの作品は、発展途上国の問題、人種間の対立、環境問題など、戦後の道徳的な問題の多くを扱っていた、と美術館のウェブサイトにも記述があります。セルゲイストローラ自身、『未来の芸術は悪にとって脅威でなければならない』と主張していました。

第二次世界大戦の直前、セルゲイストローラはフィンランドのアウランコで開かれたMRAの会議に参加しました。この会議は、20年前のフィンランドの内戦で激しく分裂した人々の和解を促し、その年の暮れ、ソビエト・ロシアが侵攻してくる前のフィンランドの再統一に貢献しました。セルゲイストローラは、MRAのフィンランドへの貢献に感謝して、コーにフレスコ画を描いたと語っていました。

セルゲイストローラの代表作には、ヘルシンキのフィンランド銀行とヴァルカウス大教会のフレスコ画があります。後者は242平方メートルもあり、スカンジナビア最大のフレスコ画と言われています。MRAの友人であるポール・グンダーセンは、セルゲイストローラがこのフレスコ画に取り組んでいる最中に彼を訪ねました。彼は線路の足場を使って壁を行ったり来たりしていました。彼はちょうど作業を中断して、個人的な助けを求めに来た女性と話をしていました。フレスコ画の制作は数時間でも中断されれば、その部分すべてをやり直さなければならないのですが、彼はそのリスクを負い女性に対応していました。

1970年、セルゲイストローラは、コーに集まった様々な分野の芸術家たちのグループの一人でした。この会議が『New Life for Art』という本につながり、彼はこの本に論文を寄稿しました。「芸術に関する事実の中で最も基本的なことは、人間と芸術は一体であるということである」と彼は述べました。批評家に対する恐れや『間違った野心』といった個人的な要因は、創造性を奪う可能性があるのです。

彼は、教会のフレスコ画を女性アシスタントと一緒に描いた例を挙げました。「ある日、私たちは次の面の色を試していました。私も彼女も描き、比較しました。私は一目で同僚の色が私の色よりも優れていることが分かりましたが、私は自分の色を使おうと言い、彼女は黙って同意しました。しかし、そこに喜びはありませんでした。チームワークは上手くいきませんでした。結果は目に見

えて悪くなっていきました。」3日目、彼はようやく彼女に嫉妬を認め謝罪し、恐怖に慄く石工に壁の面を塗装しなおしてもらい、再スタートを切りました。

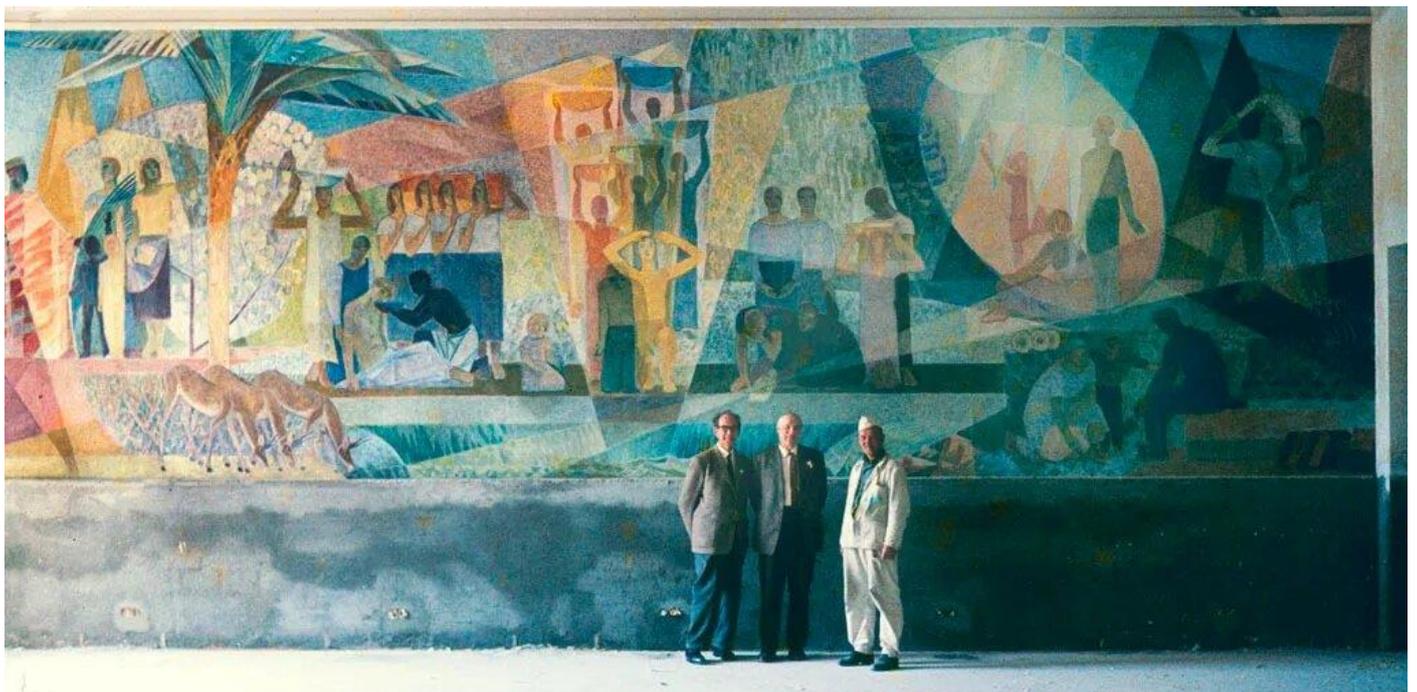
キリスト教信者であるセルゲイストローラは、テーマに関係なく、自分の芸術を神との関係を表現するものと考えていました。彼は MRA の支援に積極的で、映画『Freedom』のスワヒリ語への吹き替えのために、作品料（ほぼ半年分の収入に相当）を寄付しました（1955年参照）。グンダーセンは、セルゲイストローラの MRA への忠誠心が物議を醸した時期に大統領賞を逸したと、考えていました。

「レナートに近い人たちの中には、彼のキリスト教への傾倒が彼の時間を奪いすぎていると感じる人がいたのは、理解しうる」とグンダーセンは書いています。「レナートはかつて私に、これらの批評家たちは彼のインスピレーションが湧き出る最も深い井戸が何であるかを把握していない」と言いました。

その井戸こそが、コーにある彼のフレスコ画が表現しようとするものなのです。

メアリー・リーン

人と芸術は一心同体である



Lennart Segerstråle (center) in front of the Caux fresco



**Creating the fresco, 1959**